

日本文の場合

日本語の原稿のフォント、引用方法、参考文献などは以下のガイドラインに従う。

- 原稿は A4 横書き（1 行 42 字×1 ページ 20 行程度）とし、MS 明朝フォントで作成する。英文は黒の Times New Roman、Times Roman あるいは Times フォントを使用する。

- 見出しには、見出し番号を付ける。番号の後には全角のスペースを挿入する。

例：

1. 大見出し
 - 1.1 中見出し
 - 1.1.1 小見出し

- 執筆者は以下のフォントサイズとスタイルを用いること。

| | |
|------------|------------------|
| 表題 | ： 14pt、太字 |
| 章、節、項 | ： 12pt、太字 |
| 本文 | ： 11pt、太字は使用しない。 |
| 注 | ： 10pt、太字は使用しない。 |
| 図・表のキャプション | ： 10pt、太字 |

- 注は、本文の該当箇所の右肩に算用数字で記入する。

例：「シンガポールの日本語教育機関¹においては……………」

- 本文中での引用は、著者名(姓のみ)と出版年または注番号を記す。文献の一部を示す場合は該当する文献のページを入れる。

- 例：
- a. 佐藤（2004）によると、……………。
 - b. 佐藤¹は、…………… と述べている。
 - c. 精神文化の核である国語教育の重要性が見直されつつある（文部科学省文化審議会 2004）。

d. 「異文化間教育者による早急な意識の転換が必要である」 (菅井 2003、p. 14)。

- 参考文献は、字種ごとに分類し、辞書順に配列した上で、邦文・欧文・その他の文字の順に記載する。欧文の参考文献一覧の体裁、引用方法、および図や表の表記法はAPAガイドラインに準拠する。
書式は以下のとおり。

参考文献記入例：

新聞：

『読売新聞』2004年2月4日朝刊「社説」。

David, S. (2004, Feb 9). Multiple-choice tests punish kids who think deeply. *The Straits Times*, pp. H4.

雑誌の論文：

宇佐美まゆみ (2001) 「21世紀の社会と日本語—ポライトネスのゆくえを中心に」 『言語』 30(1)、pp. 20-28、大修館書店。

武田誠・永山友子・土井眞美・熊波由佳 (2000) 「『接触場面』の談話における『確認』」 『日本語教育方法研究会誌』 7-1、pp. 24-25、筑波大学留学生センター。

Montrul, S., & Slabakova, R. (2003). Competence similarities between native and near-native speakers. *Studies in Second Language Acquisition*, 25, 35-398.

論文集の論文：

吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」、金田一春彦(編) 『日本語動詞のアスペクト』 pp. 155-327、むぎ書房。

Prabhu, N.S. (1999). Teaching is at most hoping for the best. In C. Ward & W. Renandya (Eds.), *Language Teaching: New insights for the language teacher* (pp. 48-57). Singapore: SEAMEO Regional Language Centre.

単行本：

岡崎敏雄（1989）『日本語教育の教材』アルク

Stevick, E.W. (1989). *Success with foreign languages*. Hertfordshire: Prentice Hall.

未出版論文：

中川まちこ（2002）「第2言語としての日本語習得に関わる動機づけ—成人（留学生・社会人）にみられる動機の諸相」東京外国語大学院修士論文。

Hong L. (1976). *The intellectual awakening and social reforms of the Chinese in Singapore, 1984-1910*. Unpublished B.A. Hons. Thesis, University of Singapore, Singapore.

オンラインジャーナル：

島田徳子・吉川嘉子・麦谷真理子（2003）「インターネットを利用した日本語教師に対する教材製作支援—『みんなの教材サイト』<http://www.jpf.go.jp/kyozai/>の構築と運用—」『日本語国際センター紀要』13、pp. 1-18。

http://www.jpf.go.jp/j/urawa/public/kiyou/kiyou13/ky13_01.html

Wolfe, E.W., & Manalo, J.R. (2004). Composition medium comparability in a direct writing assessment of non-native English speakers. *Language Learning and Technology*, 8, 53-65. Retrieved January 1, 2004, from <http://llt.msu.edu/vol8num1/wolfe/default.html>.

インターネットからの参考資料：

国立国語研究所「外来語」委員会（2003）「第2回『外来語』言い換え提案—分かりにくい外来語を分かりやすくするためのことば遣いの工夫—」2003年11月13日

<http://www.kokken.go.jp/> 2004年3月10日参照。

Noblitt, J.S. (1995). *Cognitive Approaches to listening comprehension*. Retrieved January 1, 2004 from <http://www.unc.edu/cit/iat- archive/publications/noblitt/noblitt3.html>.

- 使用文字は、現代かなづかい、常用漢字、当用漢字、JIS 第2水準までの文字だけを使用する。半角カタカナ（例：ｶｶｶ）は使用しない。
- 本文の句読点は「、」（日本語入力モードの「、」）と「。」を使用する。
- ルビ（ふりがな）は使用しない。読み仮名は、各語の後に括弧書きとする。

- 数字は、原則として半角の算用数字を（例：33）を使用する。

- 固有名詞以外の外国語は、可能な限り日本語の訳語を用い、必要な場合は初出時にのみ原綴を丸括弧内に併記する。日本語であっても専門的な略語を使用する場合には、初出時に正式名を記し、それに続けて略語を括弧内に示すこと。